

「水鉄砲」が1階をだるま落としのようにすーんと…

豪雨の記憶 マップで継承

宇和島・吉田中生が発表

2018年の西日本豪雨で多くの人命を失い、家屋や畑、商店などに大きな被害を受けた宇和島市吉田地域。後世に災害の記憶を継承していくこと、吉田中学校（同市吉田町鶴間新）の1年生59人が、被災者を訪ねて聞き取った証言をまとめた「体験災害マップ」を作成した。20日に同校で発表会があり、全校生徒や保護者、地域住民らに災害の恐ろしさや防災への決意を伝えた。



西日本豪雨被災者の証言をまとめた「体験災害マップ」を発表する吉田中1年生（左）吉田中1年生が作った「体験災害マップ」に見入る上級生ら



豪雨災害の記憶を生々しく伝える「体験災害マップ」

被災者の生々しい証言 収集

愛媛大の森伸一郎准教授の指導を受け、19年度の総合的な学習の時間を使った防災学習として取り組んだ。出身地域を中心に吉田地域全域に分かれ、夏休みに被災者へインタビュー。6月から約10カ月をかけ、マップを完成させた。インタビュー相手は生徒自らが探し、自宅が被災した人、ミカン農家、公民館や養護老人ホームなどを取材。被害状況や該当地区のハザードマップ、インタビュー内容や感想を班ごとに1枚の模造紙にまとめた。

突然どーんという大きな音が鳴りました。2階にいましたが、（家が）回転しながらばりばりガラスが割れ、畳がねじ上がり、強烈な木のおお音がしました。壊れていくのは、6秒だったと思います。が、長く感じました。「水鉄砲」が1階をだるま落としのようにすーんと落としたんです。

玉津地区の被災者をインタビューした生徒たちは、土砂崩れで自宅が全壊した当時を振り返る生々しい証言を紹介した。壊れた家の前で記念写真を撮る人などに苦しみられた話も記し、「災害の時こそ相手のことを思いやれる人になりたい」と力を込めた。（中田佐知子）

避難の最中、目の前に車が流されてきたのを見て経路を変えたという体験を聞いた生徒は、「自分なら恐怖でパニックになるかもしれない」と想像。「どんな場合でも冷静に行動し、いざというときのために避難経路を決めておき、複数パターンを想定することが大事だと思った」と語った。

人命救助に当たった消防団員から「土砂崩れなどでなかなか目的の場所にとり着けず無力感に襲われた。友達のお父さんも助けられなかった」と聞いた生徒も、「とても悲しくつらいこと」を受け止めた上で「災害を乗り越え、防災についてしっかり考え実行していきたい」と話した。

発表を終えた坂本璃久さん（15）は、「じつは多くの人に伝わるかと考えながらまとめた。インタビューした皆さんは「どうなると思わなかった」と声をそろえていた。家族で僕自身もそろった。家族で話し合い、改めて避難経路などを確認して備えたい」と思ったと振り返った。

吉田中はマップの活用方法を検討中。防災学習の取り組みは20年度以降も続けていくという。